

## MSY 管理の危険性

改正漁業法はのちの歴史家に“令和漁業法”と呼ばれるだろうとの予測がある。この改正に採用されたある概念が問題で、私はこの法律が“沿岸漁業破壊法”にならないか恐れている。その概念とは、MSY 理論：Maximum Sustainable Yield 最大持続生産量である。

MSY 理論は資源量と余剰生産量にドーム状の関係があり、ある資源量で最大の余剰生産量（漁獲量）が持続的に得られるという資源管理の理論である。MSY を達成する資源量を目標として TAC（漁獲可能量）が設定され漁業がコントロールされる。資源変動は親の量で規定されるという理論で、環境変動による資源変動を無視しているのが大きな問題点であると思う。水産資源学者 Larkin は 1977 年に MSY の墓碑銘を書いた。谷津明彦氏によると、Larkin は MSY の功績を認めつつも単純すぎて現実的に使い物にならないと断じ、その理由として単一種の MSY を合計しても種間関係から達成できないこと、加入が失敗したときに資源に危機を及ぼすことなどをあげ、MSY のドグマ的乱用に警告を発した。

それから 40 年余りを経て、我が国水産行政は国際標準と銘打ってドグマ的に MSY を採用した。もちろん、学問上の発展で Larkin 以前の MSY とは違っている。しかし、その本質は変わらない。例えば、魚種交代する浮魚の MSY は同時に達成されるのかや卓越年級群が発生したときの対応などに答えがない。

浮魚資源では低水準期に卓越年級群が発生し、それを契機として資源が回復していく現象が頻繁に見られる。マアジ資源は現在低水準だが、少し前は高水準時代だった。さらに遡り 1980 年代は現在と同様の低水準であった。1986 年に卓越年級群が発生し、それを契機に資源はうなぎ上りに増え高水準を迎えた。1986 年より前は伊豆東岸定置網のマアジ漁獲量は長く年 50 トンの時代を続けていたが、卓越年級群の発生により、1986 年は 1 か月にそれまでの年漁獲量 50 トンが獲れるような大変化を遂げたのだった。

卓越年級群が発生し資源量が大幅に増加した際に、資源が低水準時に設定された TAC が卓越年級群発生時の資源量に合致していないことは明らかである。合致していないばかりでなく、複数魚種を受動的に漁獲している定置網にとっては TAC 魚種が増えてくると、卓越年級群が発生したときに各々の魚種がチョーク魚種になり操業停止に追い込まれる（クロマグロの例を見れば明らかである）。これに対応するには卓越年級群発生時の判定を即時に行い、資源量増大に見合った TAC に期中改訂すべきである。このような体制をとることができれば、資源と漁業を合理的に管理することができる。（長谷川雅俊）